

メールマガジン

第一号

2006/4/16

1 目次

- トピックス
- 九州大学北京事務所開所式典 柳原副学長挨拶
- 九州大学北京事務所開所式典 宋敏所長挨拶
- 中国留学生日本留学110周年記念式典 柳原副学長挨拶

2 メールマガジンへの寄稿

九州大学北京事務所では、中日研究・教育や九州大学OBの活動に関する情報、集会やイベントの案内など、メールマガジンの原稿を募集し、九州大学教職員・OB及び関係各位に配信します。ご寄稿くださる場合は、電子メールまたはファクスにて、九州大学北京事務所宛にお送りください。電子ファイルを添付していただくと、編集が効率的にできます。

3 事務所だより

- 5月9日～11日 第四回中国大学校長論壇を西安交通大学で開催。九州大学梶山学長、柳原副学長が出席。
- 9月9日 九州大学中国同窓会を開催。九州大学梶山学長が出席。
- 9月9日～10日 九州大学北京事務所開所記念シンポ開催。
- 九州大学北京事務所では、九州大学中国OBに関するデータベースを整備しています。ご協力をお願いします。

九州大学北京事務所 九州大学中国同窓会事務局

住所：〒100086 北京市海淀区中関村南大街甲6号铸诚大厦B座2008室

電話：+86-10-5158-1387 ファックス:86-10-5158-1367

メール：peiking_office@yahoo.com.jp (日语) kyudai_office@yahoo.com.cn (中文)

トピックス

1

九州大学北京事務所開所式典が北京友誼賓館で盛大に行われた。

4月14日、九州大学北京事務所の開所式が友誼賓館で開催し、無事に終わりました。日本の北京駐在機関、中国関連団体や大学、日本の大学・研究所の北京事務所及び九州大学中国同窓会等の関係者がおよそ70名出席し、盛大に行われました。開所式では、九州大学の穴沢一夫国際交流部部長の進行により、九州大学の柳原副学長、九州大学北京事務所の宋敏所長及び九州大学中国同窓会の徐宗学副会長が開所式の挨拶を行いました。柳原副学長の挨拶では九州大学のアジア戦略を踏まえ、北京事務所設立の背景及び意義を述べ、事務所の未来発展に熱い期待を寄せています。続きに宋敏所長は初所長を拝命した心境を語らいながら、事務所メンバーの皆さんと力を合わせて、九州大学OBの皆さんに愛される事務所作りに全力を尽くしていく決意を表しました。最後に、徐宗学副会長は事務所の益々発展を祈って、中日友好のために一緒に頑張りましょうと、九州大学中国OBの皆さんに呼び掛けています。そして、開所式は九州大学北京管崎会の福山秀夫会長の乾杯の発声により盛り上げられ、来賓の皆さんが共に九州大学北京事務所を設置することを喜んでいきます。

2

柳原副学長が中国留学生日本留学110周年記念式典に出席、挨拶

中国が日本に留学生を派遣することは2006年で丁度110周年になる。

110年の間、日本への留学生は民族解放、中国革命及び建設事業に重要な貢献をした。110年の日本留学の歴史、日本留学生の貢献と業績、中日交流と友好を宣伝する為、日本留学生同窓会の主催により、2006年4月15日午後3時に全国政協礼堂で中国留学生日本留学110周年記念式典が開催された。

全国政協副主席、中国工程院院長宋健をはじめとする中国政府要員、日本大使館、欧米同窓会・中国留学生連合友誼会・留日同窓会、日本関連機関及び日本の大学よりの代表者、留日学生代表、報道陣等が計100名程記念式典に出席した。

九州大学の柳原副学長が記念式典に出席し、九州大学及び九州の地と中国との古く太い絆を語らい、挨拶された。

■九州大学北京事務所開所式典 柳原副学長長挨拶 ■

ただいま、ご紹介にあずかりました九州大学副学長の柳原でございます。

本日は、大変お忙しい中、多数の皆様方にご出席を賜り、誠にありがとうございます。厚くお礼を申し上げますとともに、中国における本学の新たな活動拠点として、九州大学北京事務所を開設するにあたり、一言ご挨拶を述べさせていただきます。

九州大学は、2004年の国立大学法人化に伴い、世界水準の高度な教育研究の実現に向け、新たな改革を進めております。本学は地理的にアジア諸国と近く、歴史的にも中国及び朝鮮半島を中心に深く長い交流を有しており、開学当初から「アジアに開かれた大学」を標榜してきております。また本学は、アジア独自の社会、文化、歴史等の多様性を踏まえ、本学が提供する人的、知的資源を積極的に活用することによりアジアから世界へ研究成果を発信、アピールし、「世界的な知の拠点」としての本学のプレゼンスを高めようという「アジア重視戦略」を展開しているところです。その中でも特に近年発展著しい中国との関わりを強化することはアジアにおける本学のプレゼンスの確立の基軸となるものと考えております。

さて、先程も申し上げましたとおり、九州大学とアジアとの関わりは歴史の上でも古く、1911年の大学創設時には既に当時の朝鮮から1名の留学生を受け入れており、また中国との交流としましては草創期である1917年に、かの郭沫若（かく まつじやく（クオ モールオ））先生が医学部に入学され、5年余りを福岡の地で過ごされております。

また、革命の父 孫中山（孫文）（そん ちゅうざん（スン ゾンシャン））先生も九州と深い関わりがあります。日本へ亡命された孫中山先生と当時の九州の人間達との厚い連帯感は一國を超えた深いつながりを感じ得ることができます。

本学の総長室には、現在、郭沫若先生と孫中山先生の直筆の扁額が飾られていることから、お二人の先生方と本学との深い絆を感じることができます。

次に、九州大学における中国との交流の現状について、ご紹介させていただきます。

本学と中国の大学との交流状況につきましては、現在、大学間学術交流として17大学と、大学間学生交流として12大学とそれぞれ交流協定を締結しております。

最近では、2005年3月に北京航空航天大学と、4月には西安交通大学と交流協定を締結いたしました。

本学で受け入れている留学生数については、現在、1,100名を超えるまでになっており、2005年5月現在では、私立大学を含めた日本の大学716校の中でも第9位にランクされております。このうち中国からの留学生は480名近くにもなっており、全体の約44%を占め、アジア重視の国際交流を提唱している本学の中でも大きなウエイトを占めております。

また、本学独自の学生交流プログラムといたしましてアジアの大学との学生交流や研究者交流の活性化を図るために「アジア学生交流プログラム」(ASEP:Asian Student Exchange Program)を策定し、中国の大学では、現在、南京大学、復旦大学、香港大学とプログラムの協定締結を行い、相互の学生交流を実施しております。

このように近年、本学では、中国の大学との交流はますます盛んになってきており、これらの交流が将来の両国の相互理解に必ずや役立つものと確信しております。

九州大学は、海外の主要な都市に海外オフィスを設置し、優秀な外国人研究者・留学生のリクルートに関する情報、本学に関する情報・諸外国の学術情報の収集・発信及び帰国留学生の組織化支援等を行っております。これまでにロンドン、カリフォルニア、ミュンヘン、ソウルにそれぞれ海外オフィスを設置し、活動を行ってきておりましたが、この度、新たな海外オフィスとして北京事務所を設置することができました。北京は中国の首都であり、事務所のある中関村は中国における学術研究の中心として北京大学などの有力大学が多数集中している場所でもあります。

このような条件の良い場所に本学の海外オフィスを設置できましたことは、本学の今後の中国における活動において、申し分ないところであります。

北京事務所の所長には2004年12月に設立されました「在中国九州大学同窓会」事務局長でもある宋敏（ソンミン）先生に就任をご依頼し、快くこれをお引き受けいただきました。あらためて感謝の言葉を申し上げますとともに、宋敏先生には、本学の国際連携、更には産学連携の海外拠点事務所としての活動のみならず、同窓会として帰国留学生ネットワークを活かした多方面にわたる幅広い活動を期待しております。

冒頭にも述べさせていただきましたが、九州大学は、「歴史的・地理的な必然が導くアジア指向」をこれからの大学の将来構想の方向性の一つとして掲げております。アジアを基点とした、とりわけ発展著しい中国との関わりを、より強くしていくことは本学が目指している「アジア重視戦略」の礎を築いていくものと強く確信しております。また、その実現のための架け橋として北京事務所は、本学の中国における共同研究等の促進や学術情報の発信・収集において、中心的な役割を担うものと大いに期待しているところであります。

最後になりましたが、本日、ご出席いただきました皆様方にあらためて感謝いたしますとともに、皆様方におかれましては、今後ともこの北京事務所にご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。そして宋敏先生をはじめとする事務所関係者の方々の今後のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

■九州大学北京事務所開所式典 宋敏所長挨拶 ■

尊敬するご臨席の皆様方：

ようこそ九州大学北京事務所の開所式にお越し下さり誠にありがとうございます。このたび、九州大学北京事務所の初所長を拝命いたしました宋敏と申します。

本日、皆様方からのご支援・ご協力をいただき、多くの九州大学の先生方、九州大学同窓生方の絶え間のない努力こそがこうした事務所の礎を築きあげたのです。ここに、九州大学北京事務所の開所式を無事に迎えられましたことを、皆様方に感謝申し上げ、共に喜びたいと存じます。

さて、九州大学は、過去に郭沫若先生をはじめ、多くの偉大な先人を輩出し、現在では、将来構想の方向性として、「歴史・地理的必然が導くアジア指向」を大きく掲げ、アジア諸国の大学等との交流を重視、とりわけ中国の大学との交流協定締結を促進し、数多くの中国人留学生を受け入れるなど、中国との関係を大切にしております。この折、九州大学では、中国との関係を将来に向けてさらに発展させるため、中国・北京に九州大学北京事務所を開設いたしました。

九州大学北京事務所は、大学や産業界の知的な人的資源が集積し、発展の著しい中関村に設置されたことで、今後、さらなる発展の可能性を秘めております。皆様方におかれましても、中日間の教育・研究上の交流はもとより、同窓生の語らいの場として、あるいは、中日間交流に関わる情報交換の場として、気軽にお越しいただき、是非とも積極的にご活用くださいますようお願い申し上げます。

九州大学北京事務所の初所長を拝命して光栄に思うと同時に、その重責に身のひきしまる思いでおります。非力ながら私自身がたくさんのごことを勉強し、吸収して本事務所の発展のために、力を尽くして運営にあたる所存でおりますので、関係各位の皆様方には引続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願いを申し上げます。また、所長1人では何もできません。事務所メンバーの皆様にも力をあわせて、本事務所の益々発展に役割をまっとうしていただけるよう、お願い致します。

簡単で御座いますが、開所式のご挨拶とさせていただきます。有難う御座います。



■中国留学生日本留学110周年記念式典柳原副学長挨拶■

九州大学副学長の柳原でございます。本日は、中国留学生日本留学110周年記念式典という記念すべき日にご挨拶の機会をいただき、まことに光栄に存じます。

私の「やなぎはら」という姓は、風になびく優雅な枝が古来より詩人・文人たちの詩情をかき立てる、樹木の「柳」に、「平原」の「原」がついたものなのですが、中国語では「リュウユエン」と発音され、ややもすると「流言飛語」の「流言」（リュウイェン）と聞こえはしないかと、いささか懸念しておりますが、私は「デマを飛ばすような輩」ではございませんので、どうかご安心ください。

さて、我が九州大学と日本の九州という地は近代中国の黎明期にあつて革命と中国人民の救済に一身をかけ、あるいは命をも捧げた、渡日中国人留学生をはじめとする中国の歴史的人物とつながりの深い場所でございます。

九州大学は1911年に医科大学と工科大学から出発しましたが、草創期である1917年に、かの郭沫若先生が医学部に入学され、5年余りを九州福岡の地で過ごされました。郭沫若先生は私が申すまでもなく、中国科学院院長、全国政協副主席などの要職を歴任した政治家であるとともに、中国現代文学の巨人とも称されております。医学を志した郭沫若先生は少年期に煩ったチフスがもとで難聴であつたため、聴診器の音の判別に苦しみ、卒業はしたものの、結局医学の道には進みませんでした。ですから、九州は郭沫若先生にとって挫折を味わった苦しみの思い出多い地なのですが、一方で、中国の文壇に衝撃を与え、知識青年たちに熱狂的に受け入れられた詩集『女神』を発表するなど、文学的素養と感性が異国の風土と出会い、醸成され、輝きを放ちはじめた地でもあるのです。

郭沫若先生は他の中国人留学生らとともに文学結社『創造社』を創設、中国人留学生の文学活動にリーダー的な役割を果たしてゆかれました。郭沫若先生は後年、九州大学のある福岡の地を第二の故郷と呼んでくださいました。これは私たちの深くよろこびとするところです。しかしながら、彼ら中国人留学生はその文学活動をもって日本の中国侵略を激しく批判し、救国の志を掲げて、多くが抗日と革命運動に身を投じていった事実を思うとき、九州は中国革命の志士がその青春期を過ごした地であるとともに、亡国の危機と不安、憤りを抱えた中国人留学生の思いが交錯していた地であることも忘れてはならないと思います。

「悲憤」ということでは、蔡鍔將軍を思い出さずにはおられません。若くして梁啓超の民権思想に触れ、清朝打倒の蜂起軍に参加しますが、失敗します。この経験から近代的な軍事知識を身につけて祖国を救おうと決意し、日本の陸軍士官学校に入学しました。その卓越した能力と見識は早くから士官学校内で有名であつたといひます。みなさんご存じのとおり、帰国後は革命派と呼応して袁世凱政府に抵抗し、混沌・複雑化した情勢を改善できる人物として期待されますが、長年の激務から喉に病を得、治療のため日本に渡るも甲斐無く、34歳の若さで世を去りました。立ち上がったばかりで、いまだ先行きの見えない祖国を思い、蔡鍔將軍が悲憤とともに最後を迎えたその場所が現在の九州大学医学部附属病院です。

革命の父孫中山（孫文）先生も九州と深いつながりを持っていました。打倒清朝の蜂起に失敗した孫中山先生は日本へ亡命していますが、そのときに革命と孫中山先生を熱く支援した人々の中には九州の人間がまことに多くおりました。なかでも、中国の方々にも有名なのは宮崎滔天でしょう。孫中山先生の革命思想に共鳴し、親兄弟に偽って家産を処分し、自らも極貧生活をしのぎながら東奔西走して、先生の中国革命の志を支援し続けた宮崎滔天は、九州大学のある福岡と隣県の熊本との県境、荒尾の出身です。彼は周囲の反対を押し切って当時は蔑まれていた浪曲界、現代では芸能界にあたるのでしょうか、そこに身を投じてまで、亡命者や留学生への協力を惜しみませんでした。また、滔天のみならず、九州の多くの人々が、亡命者であつた孫中山先生をあるときは匿い、あるときは日本政界に働きかけ、また私財を投じて援助をおこないました。

■中国留学生日本留学110周年記念式典柳原副学長挨拶■

どうしてこれほど私利私欲から離れて、他国の革命を支援する人々が現れたのか。

彼らを突き動かしていたのは「自国だけでなくひろくアジアをとらえる目と義侠心」ではなかったでしょうか。おそらくそれは、狭隘なナショナリズムから最も遠いところにある、「アジアに暮らす人と人との連帯感」とも言い換えることができるものでしょう。

大学の国際化と連携が時代の必然ともいえるほど速やかに進み、日本国内ではいずれこの大学でも、バスに乗り遅れまいと「国際連携」がまるでスローガンのように唱えられています。

その中であって、日本と中国の留学生交流110年の歴史に思いを馳せるとき、原点として改めて想起されるのは、孫中山を「東亜の珍宝」として守らんと寄り添った宮崎滔天をはじめとする人々であり、仙台の東北医学専門学校で魯迅に中国医学界の将来を重ね、寄り添った藤野先生です。そして同時に私たちは問われています。現代に生きる私たちが留学生ひとりひとりにいかに寄り添うことができるか、国を超えた連帯を確かなものにする力と覚悟があるか、またそこに力を発揮できる人材をいかにして育ててゆくか。

九州大学は、「アジア指向」を今後の発展の大きな柱とし、アジアの主要大学との連携を強化、共同でさまざまな事業を展開しております。なかでも、アジア学長会議開催やそこで提案された学生交流、若手研究者養成のプロジェクトの推進など、中国の大学をはじめとするアジアの諸大学との協働による諸事業に、この「互いに寄り添い、助け合って発展する」精神を生かしてゆきたいと考えています。

かの魯迅先生が戦火を避け、日本の官憲や国民党の迫害を逃れながら、上海で転々としていたとき、内山書店の或る若い店員が危険を顧みず魯迅先生とその家族を守ろうと終始寄り添っていました。彼は結核を患って故郷に戻り、28年の短い生涯を終えます。上海へ戻って仕事をしたいと訴えるも叶わず、死を悟った彼は「墓は上海に向けて建ててくれるよう」遺書をしたためました。魯迅先生に寄り添い且つ寄り添われて学ぶ上海での生活は、彼の心に大きな実りをもたらしたに違いありません。魯迅先生は彼の死を聞き、彼のために墓碑を書き、墓碑は彼の故郷に渡って、上海へ向けて建てられました。

この青年の故郷は九州福岡県の糸島というところにあり、九州大学はこの糸島の地に新しいキャンパスを建設、すでに一部移転を開始しております。戦後の混乱と農地改革によって整地され、青年の墓碑は現存しておりませんが、九州大学の学生、教職員は、国を超えて寄り添い合った魯迅先生と青年の魂に見守られて学び、研究ができるという縁に、私は感謝したいと思います。

本日はこのような晴れがましく、記念すべき場にお招きいただき、九州大学総長に成り代わって、皆様方に祝福の言葉を贈らせていただく機会に恵まれましたことを、私の人生の忘れ得ぬ一日として記憶してゆくことになるであろうことを確信し、皆様方の益々のご発展とご健勝を祈念しつつ、挨拶の言葉とさせていただきます。

ありがとうございました。

